

[会長講演]

幕末から明治期佐賀の指導医たち

—お雇い外国人医師を含めて—

前山隆太郎

介護老人保健施設水郷苑

蘭学の台頭から好生館設立まで

第八代治茂(1745-1805)は天明元年(1781)藩校「弘道館」を設置し古賀精里(1750-1817)を初代教授として迎え、寛政3年(1791)には長崎の植林采哲高茂(1737-1797)を蘭方医として最初の佐賀藩医とした。古賀穀堂(1778-1836)は文化3年(1806)年、第九代斉直(1780-1839)に28ヵ条からなる「学政管見」を上程し、23条では長崎御番を勤める藩として蘭学教育の必要性を、24条では「学問ナクシテ名医ニナルコト覚東ナキ儀ナリ」と医学教育の必要性を述べた。

蓮池支藩の島本良順(?-1848)は、長崎に蘭学を学び帰藩後蘭学塾を開いたが、伊東玄朴(1800-1871)、大庭雪斎(1805-1873)、大石良英(?-1865)、金武良哲(1811-1884)らが入門している。伊東玄朴、大庭雪斎、大石良英は文政6年(1823)長崎出島に着任したシーボルトにも師事した。

直正(1814-1871)は天保元年(1830)第十代藩主となり、相談役として補佐したのは古賀穀堂であった。「医学寮」が八幡小路に試設されたのは天保5年(1834)年7月16日。寮監は島本良順。伊東玄朴が江戸藩邸侍医となったのは天保14年(1843)、大石良英が佐賀藩邸侍医になったのは弘化1年(1844)である。

弘化4年(1847)直正は伊東玄朴の牛痘苗による天然痘予防の進言を入れ、取り寄せ方を植林宗建(1802-1852)に命じた。宗建はモーニケによりもたらされた牛痘痂を嘉永2年(1849)7月建三郎に接種し成功。8月22日侍医大石良英は佐賀城本丸で直正世嗣子淳一郎(後の藩主直大)に種痘した。これを契機に佐賀藩は「引痘方」を置き領民に種痘を普及させていった。嘉永4年(1851)には「医業免札制度」を発足させ、領内の医師に試験を行い合格者に医術開業の免札を与えた。安政5年9月には「御側医師は申すに及ばず陪臣町医郷医に蘭方医学修行仰せ付ける」との達しが出されている。

好生館設立から明治維新まで

安政5年(1858)12月26日医学寮は水ヶ江に移転され直正により「好生館」と命名された。「好生館医則」には「医之為道所疾患而保健康者也苟欲学斯道者必当明七科而從事於治術也」と書かれ、履修すべき七科として「格物窮理、人身窮理、解剖学、病理学、分析学、薬性学、治療学」があげられている。万延元年(1860)の教導方頭取は大庭雪斎、教導方頭取兼帯は大石良英、教導方は渋谷良次・牧春堂・城島淡堂・島田嶺南・林梅馥、教導方差次は松隈元南・西牟田玄才・野口文郁、指南役に上村春庵・植林蒼壽・高木玄堂・朝日揚庵・大中春良・島田東洋、御雇指南役は金武良哲・島田芳橘である。

文久元年(1861)1月には「漢方を廃して西洋医方に改む」との通達を出し、好生館で再教育を受け医業免札の書き替えを命じた。

相良知安(1836-1906)は弘道館から好生館に学び、その後藩命により佐倉順天堂、長崎の精得館に学び、慶応3年(1867)好生館教導方差次、直正の侍医となった。明治2年(1869)には福井藩医岩佐純(1836-1912)と共に明治政府の医学取調御用係を命じられ、独逸医学導入を進言。今日の医療制度の基礎を作った。

明治政府下の好生館とお傭い外国人医師

佐賀藩は明治4年7月佐賀県、9月伊万里県、明治5年5月佐賀県、明治9年4月三潞県、8月長崎県となった。長崎県から今日の佐賀県に戻ったのは明治16年5月である。

シモンス O. Simmons 明治4年11月20日伊万里県から大蔵省に提出された「病院教師雇入願」には「元佐賀県病院教師東校御雇入テ子マルカ人シモンス儀月給三百円トルニテ最前公費ヲ以テ雇入願之通被遂御許容候処更東校御雇入相成別紙写之通候条」と書かれている。

ヨングハンス L. H. Junghanns 明治5年3月から明治6年2月まで好生館で医道教師を務めた。月給は500ドル。ヨングハンスは東京築地居留地在住時代に、東京の佐賀藩邸で病む直正公を往診している。往診は明治3年11月24日から逝去前日の明治4年1月17日まで合計8回に及んだ。ヨングハンスは明治6年5月から愛知県公立病院に勤務している。

スローン Robert J. Sloan 明治6年5月から明治9年4月まで勤務。月給は375円。明治7年2月に始まった「佐賀の乱」は4月13日江藤新平と島義勇の梟首で終焉した。明治8年1月内務卿大久保利通に「当県病院備スローン氏及び医員中へ御賞賜之義ニ付上申」が上程され「当県下病院雇入人スローン義ハ昨年春県下騒擾之御難ヲ長崎ニ避ケ……病院一時瓦解之姿ニ之有候処官軍入城之時ニ至リ……スローン氏長崎ヨリ呼迎候処……所々在之医員ヲ招集シ二百余名之患者ヲ引受昼夜ノ別ナク治術ニ従事致シ……」と褒賞の趣旨が述べられている。明治8年6月スローン以下17名の医師に月給半額相当が賞与された。

明治8年7月文部大輔に提出された「公立病院兼医学所伺」には、名称は好生館医学所。予科3年間で独逸語、ラテン語、算術代数学、究理学、幾何学、無機化学、有機化学を学び、本科4年間で組織学、解剖学、生理学、薬性学、製薬学、病理学、内科総論、包帯学、内科各論、外科、眼科、産科を履修としている。一等医の松尾良明、二等医の山口練治・池田陽雲、三等医の澤野種親・太田静造・山口亮橋・池田専助、四等医の村岡安碩・塩田範一郎・石井重義の履歴書も添付されているが、一等医松尾良明の履歴書には、「旧藩医学校入学七ケ年 長崎留学三ケ年 精得館ニ於テホトウケン マンスヘル ハラトマン三氏江学術伝習 奥羽役軍医ヲ務メ続テ東京大病院ニ於テシドル ウリュスニ氏ニ隨身六ケ月 県下病院ニ於テヨングハン スローンニ氏ニ業ヲ受ク四ケ年」と記載され、四等医石井重義の履歴書には「十八歳ヨリ医学校好生館入学 明治四年夏東京医学校入学 独逸教師トクトル・シモス、トクトル・ワグネル両氏ニ従ヒ独逸語学羅甸学数学修業 トクトル・ヒルゲントルフ、トクトル・コツヒウス トクトル・フンク三氏ニ従ヒ歴史精神学理化学幾何学代数学普通動植物学研究 同七年冬予科卒業第三等本科エ上級 プラベスソル・トクトル・デーニッツ氏ニ従ヒ解剖学研究 同八年春婦県四月病院備四等医々学所専務被申付候也」と興味深い記載がされている。

明治10年7月7日付長崎県佐賀支庁公文書には「今般独逸人医師シモンス1名壹ヶ年ノ条約ヲ以備入シ……」とあり、明治10年7月から明治11年6月まで勤務した。明治4年のデンマーク人O. Simmonsと同一人物の可能性はあるが不明である。

Karl Wilhelm Doenitz (1838-1912) 明治12年8月7日長崎県佐賀郡立好生館医学校に着任。月給500円。佐賀では、妻、長女、長男との4人暮らしであった。デーニッツはベルリン大学卒。明治6年7月来日。東京医学校で解剖学、病理学を講義。明治9年裁判医学校で断訟医学を講義した。好生館医学校は明治16年池田陽一(東大明16年卒)、川原汎(東大明16年卒)、デーニッツの三名教授による甲種医学校となった。明治18年11月11日ドイツに帰国。コッホを助け伝染病の研究にあたった。

デーニッツ帰国以降、医学校は維持することが次第に困難となり、明治21年県費補助が打切られ廃校となった。病院の方は「公立佐賀病院」として維持され、明治29年12月11日現在の「佐賀県立病院好生館」になった。